

一心寺かわら版

第四十九号 令和二年三月発行

持名山一心寺 検索

阿弥陀さまとお釈迦さまの関係

日本仏教には浄土真宗、真言宗、禅宗などさまざまな宗旨があります。一心寺のご本尊は阿弥陀如来。經典には数多くの仏さまがおられます。と説かれ、大日如来、薬師如来などをご本尊とする寺院もあります。しかし、仏教というからにはその開祖は釈迦如来（お釈迦さま）です。では、お釈迦さまをご本尊にしないというのはどういうことでしょうか。お釈迦さまと阿弥陀さまの関係はどのようなものなのでしょう。浄土真宗の開祖・親鸞聖人が著された『教行信証』の「正信偈」には、「如来所以興出世」（お釈迦さまがこの世にお出ましになられた理由は、ただ阿弥陀仏の本願のみ教えを説くためでした）とあります。また、唐の善導大師が説かれた「二河白道の譬え」を引用して詳しく説明されています。

「ここに一人の人がいて、百千里の遠い道のりを西に向かって行くとしていて。その途中に、突然二つの河が現れる。一つは火の河で南にあり、もう一つは水の河で北にある。その二つの河はそれぞれ幅が百歩で、どちらも深く底がなく、果てしなく南北に続いている。その水の河と火の河の間に一筋の白い道がある。その幅はわずか四、五寸ほどである。この道の東の岸から西の岸までの長さも、また百歩である。水の河は道に激しく波を打ち寄せ、火の河は炎をあげて道を焼く。水と火とがわかるが、道に襲いかかり、少しも止むことがない。

この人が果てしない広野にさしかかった時、他にはまったく人影はなかった。そこに盗賊や恐ろしい獣がたくさん現れ、われ先にと襲ってきて殺そうとした。そこで、この人は死をおそれて、すぐに走って西に向かったのであるが、突然現れたこの大河を見て次のように思った。この河は南北に果てしなく、まん中に一筋の白い道が見えるが、それはきわめて狭い。東西兩岸の間は近いけれども、どうして渡ることができよう。わたしは今日死んでしまふに違いない。東に引き返そうとすれば、盗賊や恐ろしい獣が次第にせまってくる。南や北へ逃げ去ろうとすれば、恐ろしい獣や毒虫が先を争ってわたしに向かってくる。西に向かって道をたどって行こうとすれば、また恐らくこの水と火の河に落ちるであろう、と。こう思って、とても言葉にいい表すことができないほど、恐れおののいた。

そこで、次のように考えた。わたしは今、引き返しても死ぬ、とどまって死ぬ、進んでも死ぬ。どうしても死を免れないのなら、むしろこの道をたどって前に進もう。すでにこの道があるのだから、必ず渡れるに違いない、と。

こう考えた時、にわかに東の岸に、「そなたは、ためらうことなく、ただこの道をたどって行け。決して死ぬことはないであろう。もし、そのままそこにいるなら必ず死ぬであろう」と人の勧める声が聞こえてきた。また、西の岸に人がいて、「そなたは一心にためらうことなくまっすぐに来るがよい。わたしがそなたを護ろう。水の河や火の河に落ちるのではないかと恐れるな」と喚ぶ声がする。この人は、もはや、こちらの岸から「行け」と勧められ、向こうの岸から「来るがよい」と喚ばれるのを聞いた以上、その通りに受けとめ、少しも疑ったり恐れたり、またしりごみしたりもしないで、ためらうことなく、道をたどってまっすぐ西へ進んだ。

そして少し行ったとき、東の岸から、盗賊などが「おい、戻って来い。その道は危険だ。とても向こうの岸までは行けない。間違いないで死んでしまうだろう。俺たちは何もお前を殺そうとしているわけではない」と呼ぶ。しかしこの人は、その呼び声を聞いてもふり返らず、わき目もふらずにその道を信じて進み、間もなく西の岸にたどり着いて、永久にさまざまなわざわいを離れ、善き友と会って、喜びも楽しみも尽きることがなかった」



(二河白道図 左・阿弥陀さま 右・お釈迦さま)

東の岸は娑婆世界、西の岸をお浄土に、東からの声はお釈迦さまの教え、西からの声は阿弥陀さまの本願の譬えです。水と火の二河というのは、私たちの貪りや執着の心を水にたとえ、怒りや憎しみの心を火に、間にある四、五寸ほどの白い道というのは、その私たちの心の中に清らかな信心がおこることをあらわします。盗賊などが呼ぶというのは、間違った考えの人々によって惑わされることだと言われます。

また、『教行信証』の別の箇所には、「一心にただ仏の言葉を信じ、わが身もわが命も顧みず、疑いなく仏が説かれた行によって、仏が捨てよと仰せになるものを捨て、仏が行ぜよと仰せになるものを行じ、仏が近づいてはならないと仰せになるものに近づかないことである。これを、釈尊の教えにしたがい、仏がたの意にしたがうという。これを阿弥陀仏の願にしたがうという。これを真の仏弟子というのである」とあります。

浄土真宗ではお釈迦さまをご本尊とはしていませんが、教主として敬っています。自分の力では、煩惱にまみれた、火と水とが渦巻く細い道を渡りきることはできません。お釈迦さまの教えに従い、阿弥陀さまの呼び声を聞いて「南無阿弥陀仏」とお念仏を称えて生活し、浄土に往生し仏となることがお釈迦さまのお心にかなうことであるとされているわけです。

さて、四月八日はお釈迦さまの御誕生を祝う花まつり。観音寺市仏教会では毎年、会員寺院が持ち回りで会所を引き受けて開催しています。本年は二十数年ぶりに一心寺が会場となる予定です。浄土真宗・真言宗・禅宗・浄土宗・天台宗・日蓮宗の二十余ヶ寺が集ってお勤めする滅多にない機会、是非お参りください。

※コロナウイルス流行のため、執筆時点では開催・中止は未定です。



報恩講報告

一月十三日、本年も一心寺での報恩講が勤まりました。十一月中旬より喉の調子が悪く、みなさまのお宅への報恩講参りが遅れましたが、前日によくやく終えることができ、無事に当日を迎えました。立専寺（観音寺市流岡町）ご住職を導師に、讚仏偈と正信偈をお勤めさせていただきました。

法話は千葉憲文師（まんのう町・善性寺）。人間はみんな自分の都合で生きている。晴れが続けば雨がほしい、雨ばかりだと晴れてほしい。しかし、私たちははかりしれないのちに生かされていることを忘れてはいけません。胆振東部地震が起こった北海道を



訪れた時のエピソード。食事をしようにも電気が止まっているために開いている店がない、宿泊予定のホテルは水も出ない。「うちのお寺は古い建物ですが、ガスもあるし水も出るのどどうぞ泊まってください」とおっしゃってくださいましたご住職のおかげで事なきを得た。普段の生活がいかに「有り難い」、あることが難しいものなのかを実感されたそうです。はかりしれないのちのはたらきを感じるところに、私たちをお浄土へとすくい取ってくださいる阿弥陀さまのお慈悲も感じられるのではないのでしょうか。

仏教講演会のご案内

今年の仏教講演会は国立鹿児島医療センター緩和ケア委員・長倉伯博師（右）の「生と死の境を超えてー医療と仏教の協働から生まれるもの」、介護福祉士でシンガーソングライター・かんのめぐみ氏（左）の「歌で紐解くあなたのアナザーストーリー」です。

私たちは生老病死を逃れることはできず、必ず人生を終えていきます。私たちの前に大勢の先人がその道を歩んでいます。その方たちにどのように声をかければ、安心と喜びの人生を全うしていただけることができるのでしょうか。知識も乏しく、経験も不足している私ではどうして良いかわからないと途方に暮れることもあるでしょう。長倉先生、かんのさんは実際に多くの人たちをお世話し、看取ってこられました。その経験から多くのことが学べるのではないかと思います。



す。また、それが私自身の人生の終わりに向けてのより良き道につながるのだと思います。是非ご来場ください。

※四月十八日午後一時半より、綾歌アイレックスで開催予定ですが、コロナウイルス流行のため、執筆時点では開催・延期は未定です。

法事で幸せになる？

法事をお勤めする心は仏徳讃嘆・報恩感謝といわれてきました。先に浄土に往生された故人を偲び、私を同じくお浄土へ導いてくださる阿弥陀さまの願いを聞かせていただいて、それに安心し喜び感謝する。近年、そのような宗教的意味だけでなく、人間の幸福に寄与しているという統計結果が出ています。北海道大大学院教授・櫻井義秀氏(左)の文章をご一読ください。



「宗教とソーシャルキャピタルに加えて、私が近年取り組んでいるのが、宗教とウェルビーイングの研究である。ウェルビーイングとは主観的幸福感と客観的な生活保障を合わせた概念である。「しあわせ」を味わえることと言い換えてもよい。

日本のウェルビーイング研究は従来、健康(医療)・経済状況(年金)・社会関係(家族・友人)・趣味(生きがい)と幸せ感との

関わりを考えるものが多く、生活態度や価値観、信仰の有無から人の幸せを考えるという発想が乏しかった。その理由は、日本では無信仰・無宗教を自認する人が約七割を占め、学術的研究に「宗教」を入れ込むことがはばかられ、「スピリチュアリティ」と遠慮がちに表現したり、教育・医療・政治といった公的空間に宗教を持ち込まないと自主規制したりした社会背景があるう。

私が二年前に実施した全国で無差別に抽出した一二〇〇人対象の調査では、主観的幸福感が、法要の実施、祭礼への参加によって統計的に意味のあるレベルで増加することがわかった。日本人が宗教行為と意識しない正月の初詣や盆・彼岸の墓参り、先祖への報恩感謝の気持ちなども幸福感を増加させる。その意味は何かである。

先祖祭祀という宗教儀礼には、自己を親(遡れば先祖)と子(下れば子孫)との関係で捉える関係論的自己認識がある。自分のいのちが自分だけのものではないこと、具体的な身近な人に支えられて自分があること、それゆえの自己の戒めなどを慣習として身につける行為が先祖祭祀である。心理学的にいえば、孤立感に陥らず、安定的自己を維持することに寄与する。

地域で行われる祭礼に参加することは、親族を超えた社会関係に具体的に自己を位置づけ、自分の役割を得ることである。しかも、職場や一般社会における能力評価とは別の次元で、その人自身の存在が認められ、自己効力感を確認できる場となる。

靈魂やカミの存在といった宗教論をなすずとも、世俗的な学問の水準でも、慣習的な宗教行為や意識と主観的幸福感の関係していると説明できるのである。

現代は、家族葬から直葬・無葬へ、年忌法要、祭祀や儀式も手間だから、人に気を遣わせるからと簡略化や省略の方向にある。それは社会的・心理的安定を図るためのせつかくの機会を自ら喪失することになる。慣習の中には優れたグリーフケアの知恵がある」。

